

米価の高騰が農家と消費者に与える影響

—農家経営と消費者意識の変化を中心に—

本研究は、2024年から2025年にかけて生じた米価高騰を事例として、消費者と生産者の双方の視点から、価格変動が日本の米産業に与える影響を明らかにすることを目的とした。具体的には、消費者の購買行動や価格意識の変化を既存調査データから分析し、農家経営の実態を埼玉県
の農家3名へのヒアリング調査を通じて明らかにした。さらに、双方の価格認識のギャップを比較分析し、米産業の持続可能性における課題を考察した。

分析の結果、消費者の9割以上が価格上昇を実感し、約半数が「2,500円以下」を適正価格と考えている一方、生産者が考える適正価格は「3,000円から3,500円」であり、両者の間には約1,000円のギャップが存在することが明らかになった。このギャップは、生産コストの見えにくさ、長期的な安い米価のイメージ、価格上昇の利益配分の分かりづらさによって生じていた。

米価高騰は、消費者にとって家計への負担増加、選択肢の制約、米離れの加速リスクをもたらす「逆風」として作用した。一方、生産者にとっては所得向上の機会となったものの、生産コストの大幅上昇により利益は相殺され、「米価上昇=農家の所得向上」という単純な構図は成立しなかった。この価格認識のギャップは、価格上昇→消費減少→生産縮小→供給不安→さらなる価格変動という悪循環を引き起こすリスクがあり、基幹的農業従事者の高齢化と後継者不足が進む中、日本の米産業の持続可能性に深刻な課題をもたらしている。

相互理解を深めるための手がかりとして、本研究では、農業体験を通じた理解の促進、生産コストの可視化、双方向の理解の促進という3つの方法を提示した。今回の米価高騰は、日本の食料供給体制の問題を明らかにすると同時に、多くの国民が農業の現実に目を向けるきっかけとなった。生産者と消費者が互いの立場を理解し、持続可能な価格水準を共に模索していくことが、日本の米産業の未来にとって不可欠である。